

吉田信太郎作  
定國  
高等小學讀本唱歌  
上

K/20.73  
37  
1

K120.73

39

1

國定  
高等小學讀本唱歌上

吉田信太作曲



東京  
郁文舍





ものみに曲節を附しぬ

- 一、本書は程度を逐ひ歌章の意義を鑑み作曲したるものなれば能く其曲想到に注意し教授するを要す
- 一、本書中一音符に二文字を配當したるはその音長を二等分するものなり

明治 14 年 内交

目次

一、春の景色……………四

一、夏やすみ……………六

一、富士登山……………九

一、聯隊旗……………一二

一、奈良……………一六

一、須磨明石……………一八

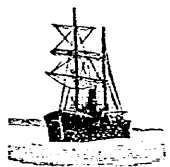
一、海國男子……………二〇

一、日光……………二三

一、遠洋漁業……………二五

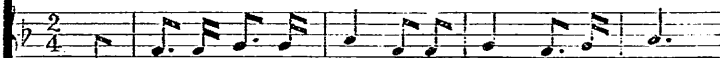
一、水の變態……………二八

一、白虎隊……………三三



# — [春の景色] —

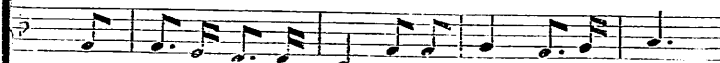
へ調二拍子



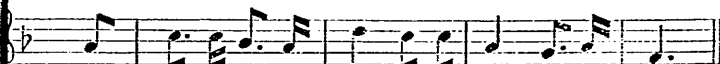
5 | 1. 1 2. 2 | 3 1 1 | 2 1. 2 | 3.  
 ス ミ レ ツ ミ ツ ツ カ ヘ リ ユ ク  
 ニ て に も つ は な を し た ひ く る



3 | 3. 4 5. 3 | 6 5 5 | 3 2. 3 | 1.  
 ハ ル ノ ユ フ ベ ノ ム ラ ノ ミ ナ  
 ち - の こ こ ろ の あ い ら し さ



1 | 1. 7 6. 6 | 5 1 1 | 2 1. 2 | 3.  
 ト モ ナ ヒ カ ヘ ル チ ョ - フ タ ツ  
 い ぎ き て あ そ べ も ろ と も に



3 | 5. 5 4. 3 | 6 5 5 | 3 2. 3 | 1. ||  
 ア ル ヒ ハ サ キ ニ マ タ ノ ナ ニ  
 さ く ら さ か り の わ が に は に

## ● 春の景色 (讀本卷一)

一 すみれつみつ、 歸り行く、

一 春のゆふべの 村の道。

一 ともなひ来る 蝶、二つ、

一 あるひは、先に、 また、後に。

一 手に持つ花を したひ来る

蝶チユウの心の 愛らしさ。

いざ。来て遊べ、 もろともに。

櫻さかりの わが庭に。

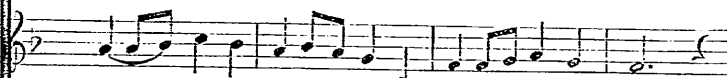
# — ♪ [夏やすみ] ♪ —

へ調四拍子



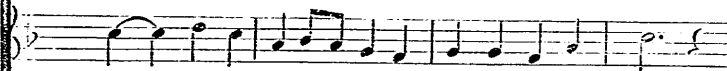
1 1 2 3 2 | 1 2 1 6 5 | 1 1 2 3 1 | 2-0

一 コトシノ ナツノ ヤスミニ ハ  
二 コトシノ ナツノ ヤスミニ ハ



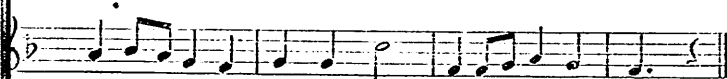
3 3 4 5 4 | 3 4 3 2 5 | 1 1 2 3 2 | 1-0

ヤーマニ アソビテ カヘリコ  
カイスイ ヨークモ ココロミ



5 5 6 5 | 3 4 3 2 1 | 2 2 1 3 | 5-0

マツノ コカゲニ ヤスミテ ハ  
ヨセテハ ユーキト チルナミ



3 4 3 2 1 | 2 2 5 | 1 1 2 3 2 | 1-0

タキミル コトモ タノシミ  
タデアケ クレノ トモトシ

## ◎ 夏やすみ (讀本卷二)

一 ことしの夏の体には、

山に遊びて、歸り來ん。

松の木陰に、休みては、

瀧たき見ることも樂たのよ。

二 ことしの夏の体には、

海水浴もこころみん。

よせては、雪とちる波を、

ただ、あけくれの友として。

# 【富士登山】

イ調四拍子



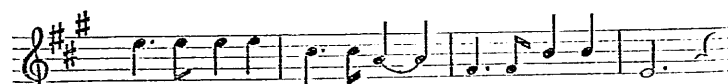
5-5 5 | 1. 1 1 1 | 6. 6 6 6 | 6-0

一 キ シ ノ マ ド ヨ リ ア フ ギ ミ ル  
二 フ ネ ノ ヘ サ キ ニ ナ ガ メ ヤ ル



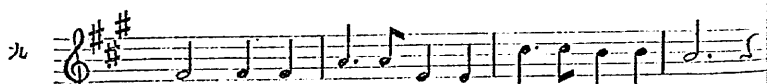
5-5 5 | 1. 1 1 1 | 2. 2 1 2 | 3-0

フ シ ノ タ カ ネ ノ ケ ダ カ サ ヨ  
フ シ ノ ケ シ キ ノ オ モ シ ロ ヤ



5. 5 5 5 | 3. 3 1 1 | 6 6 2 2 | 5-0

ク モ ヨ リ ウ ヘ ニ ス ケ イ デ テ  
サ カ サ ニ ウ ツ ル ウ ナ バ ラ ノ



6-6 6 | 1. 1 5 5 | 3. 3 2 2 | 1-0

イ ツ モ タ カ ネ ノ ユ キ フ カ シ  
カ グ ハ ヌ ヨ リ モ タ ク ミ ニ テ

三

からだきたふは山の道、

空気のよきは海のそば。

花つみ集め、貝を取り、

智識ひろむる益多し。

四

いざいざ行かん、この夏も。

父もろともに、母ともに。

かはれる里のならばしを

見聞くもうれし、旅をして。

◎富士登山（讀本卷二）

10

一 汽車の窓より、あふぎ見る

富士ふじのすがたのけだかさよ。

雲より上にぬけ出でて、

いつも、たかねの雪白し。

二 船のへさきに、ながめやる

富士ふじのけしきのおもしろや。

さかさに、うつるうなばらの

かげは、ゑよりも、たくみにて。

三 山は、世界に、多けれど、

形のよきは、この山ぞ。

春のかすみのたつあした、

秋の入日のさす夕べ。

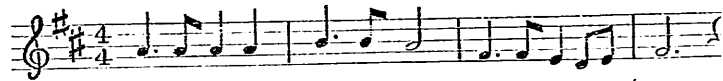




【聯 隊 旗】

(つぎ)

ニ調四拍子



5. 5 5 5 | 6. 6 5- | 3. 3 2 1 2 | 3- 0

カタヲケ ナクモ ソノヘリー ハ  
サケシチ ハタノ ホマレトシ



5. 5 6 6 | 5 5 3 3 | 2. 2 2 3 | 1- 0

コーゴー ヘイカノ オンテヌ ヒ  
ヒトタビ エテハー チヨマデ モ



1. 1 7 6 | 5. 5 3- | 2. 2 2 1 2 | 3- 0

マタカシ コクモ バンゴー ハ  
ヨロヅヨ マデモ ツタヘユク

131

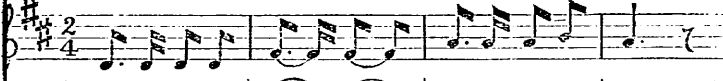


5. 5 6 6 | 5 5 3 3 | 2. 2 5 5 | 1- 0

テンノー ヘイカノ オンフデ ヅ  
レンタイ キコソー ヲフトケ レ

【聯 隊 旗】

ニ調二拍子



1. 1 1 1 | 3. 3 3 3 | 5. 5 5 6 | 5. 0

ワガテン ノーノー ミテヅカラ  
ニ ナーガキ ツキヒノ ソノアヒダ



3. 3 3 3 | 5. 5 1 1 | 3. 3 3 3 | 2. 0

サーヅケ タマヘル レンタイ キ  
カーゼニ サラサレ アメニヌレ



6. 6 6 6 | 1. 1 5 5 | 6. 6 6 6 | 5. 0

ハータノ テガラハ クニノホマレ  
グンバノ アヒダチ オーライシ



3. 3 3 3 | 5. 5 1 1 | 3. 2 2 3 | 1. 0

ハータノ ケガレハ クニノハサ  
クロキチ ハタノー ヒカリトシ

132

● 聯 隊 旗 (讀本卷二)

わが天皇の御手づから、

さづけたまへる聯隊旗

旗のてがらは國のほまれ、

旗のけがれは國のはぢ。

かたじけなくも、その縁は

皇后陛下の御手縫。

またかしこくも、番號は

天皇陛下の御筆ぞ。

長き月日の、その間、

風に、さらされ、雨に、ぬれ、

軍馬の間を往來し、

黒きを旗のひかりとし、

さけしを旗のほまれとし、

ひとたび、えては、千代までも、

萬代までも、つたへゆく

聯隊旗こそたふとけれ。

# 【奈 良】

変ホ調六拍子

一  
ハ ナノゴート クニサ カエーグ ルー  
二  
テ ラニマーツ レルダ イーブーツ ノー

一  
ナ ラーノミ ヤーコ ノオ モーカーク ナー  
二  
ツ ノーコン リュー ハシ ムーテ イー

一  
チ トセノーノ ナーニナ ホーノコ スー  
二  
ゴ ヲョーサーン ジャークゴ スンアールー

一  
メ イシヨキユーー セキカズーオホー キー  
二  
ヅ ーナスエ タルプ ツーザン ノー

一  
ナ カニモナ ダーカキト ーダーイ ヲー  
二  
イ ラーカク モーキニツ ビーエータ リー

● 奈

良 (讀本卷三)

一 花のごとくに、榮えたる 奈良の都の面影を、

千歳ちとせの後に、なほ、残す

名所、舊蹟きよせき數多き

中にも、名高き東大寺。

二 寺にまつれる大佛だいはつの、その建立こんりゅうは聖武帝せいむてい。

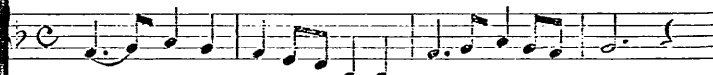
五丈三尺五寸ある

像ぞうをすゑたる佛殿ぶつでんの

いらか、雲井くもゐにそびえたり。

# —※※[須磨明石]※※—

へ調四拍子



1. 2 3 2 | 1 7 6 5 6 | 1. 2 3 2 1 | 2-0

一 マー ツ ハ ミ ドー リ ニ ス ナ シ ロ ー ク

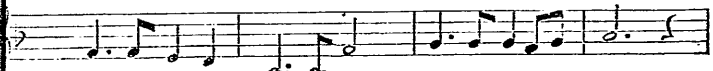
二 ホ カ ケ テ イ ズ ー ル ー フ ネ オ ホ ー ク



3. 4 5 3 | 5 6 5 3 1 | 2. 2 2 3 2 | 1-0

フ ー ケ イ ス グ ー ル ル ス マ ノ ウ ー テ

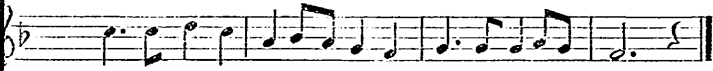
ア サ ウ ミ ニ ギ ー ハ フ ア カ シ ガ ー タ



1. 1 7 6 | 5. 5 1- | 2. 2 2 1 2 | 3-0

イ ワ ベ ニ イ デ テ カ ヒ ヒ ロ ー フ

ア カ シ ノ シ ロ モ ヒ ト マ ロ ー ノ



5. 5 6 5 | 3 4 3 2 1 | 2. 2 2 3 2 | 1-0

コ ド モ モ ナ ガ ー メ ノ ヒ ト ツ ナ ー リ

ヤ シ ロ モ コ ノ マ ニ ミ ユ ル ナ ー リ

## ● 須磨明石

(讀本卷三)

一

松は縁に、砂白く、

風景すぐる須磨の浦。

磯邊に出でて、貝拾ふ

子どももながめの一つなり。

二

帆かけて、出づる舟多く、

朝海にぎはふ明石潟。

明石の城も、人麻呂の

社も、木の間に、見ゆるなり。

三

海のあなたに、いと近く、

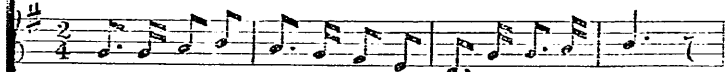
見ゆる陸地は淡路島。

通ふ汽船の笛の音も、

涼しく、波に、ひびくなり。

# — [海國男子] —

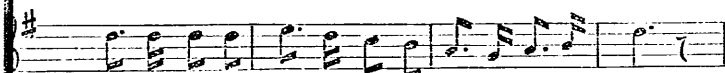
ト調二拍子



	1.	1	2	3	2.	1	7	6	5.	1	1	2	3.	0
一	リ	ガ	ス	ム	ニ	ツ	ポ	ン	テ	イ	コ	ク	ノ	
二	コ	ノ	カ	イ	コ	ー	ク	ニ	ウ	マ	レ	ク	ル	



	3.	4	5	3	2.	1	7	6	5.	1	2	3	1.	0
	シ	メ	ン	ハ	ウ	ー	ミ	ニ	カ	コ	マ	レ	テ	
	ニ	ツ	ポ	ン	ダ	ン	シ	ハ	ク	ニ	ノ	タ	メ	



	5.	5	5	5	6.	5	4	3	2.	1	2	3	5.	0
	イ	ツ	ク	ニ	ユ	ク	ニ	モ	サ	チ	カ	シ	チ	
	ナ	ミ	ヂ	チ	オ	ノ	ガ	ー	イ	ヘ	ト	シ	テ	



	5.	5	1	2	3.	3	2	1	5.	5	2	3	1.	0
	カ	ー	ラ	デ	ス	ス	マ	ン	ミ	チ	ア	ラ	ズ	
	ス	ー	マ	ン	カ	ク	ゴ	チ	サ	ダ	ム	ベ	シ	

## ● 海國男子

(讀本卷三)

一 わが住む日本帝國の

四面は海に圍まれて、

いづくに行くにも、棹楫さかひかいを

借らで、進まん道あらず。

二 この海國に、生れたる

日本男子は、國のため、

波路なみぢをおのが家として、

住まん覺悟を定むべし。

# — [ 日 光 ] —

へ調四拍子



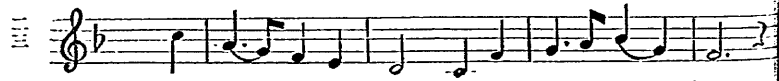
5̣ | 1̣. 7̣. 1̣ 2̣ | 3̣. 2̣ 1̣ 3̣ | 5̣. 4̣ 3̣ 1̣ | 2̣- 0̣  
 一 キ シューノナ チャートモ ロートモニ  
 二 オ チクルミ ヅーハシ ローヌノチ



3̣ | 5̣. 5̣ 4̣ 3̣ | 2̣- 1̣ 1̣ | 7̣. 6̣ 5̣ 2̣ | 1̣- 0̣  
 ソ ノナシラ レ シニ ツーコーノ  
 ソ ラニカケ タ ル コ コーチシテ



3̣ | 5̣. 5̣ 3̣ 5̣ | 6̣- 5̣ 4̣ | 3̣. 2̣ 1̣ 2̣ | 3̣- 0̣  
 ケ ゴンノタ キ ハソ ノータカサ  
 カ ミナリヒ ビ キユ キークダケ



5̣ | 3̣. 2̣ 1̣ 7̣ | 6̣- 5̣ 1̣ | 2̣. 3̣ 4̣ 2̣ | 1̣- 0̣  
 サ ン - ヲ - ヲ - ア リ ト イ - フ  
 ト ビ ナ ル ア ソ ハ タ ニ ニ ミ - ツ

三 山なす、沖の大波も、

恐れず、進む勇氣こそ、

幼き時の練習に

よりて、えらるる身の寶たから。

四 泳の業わざも怠るな。

ぼーとの遊もこころみよ。

日本は海の國なるぞ。

海はわれらの家なるぞ。

# — [ 遠洋漁業 ] —

變ホ調四拍子



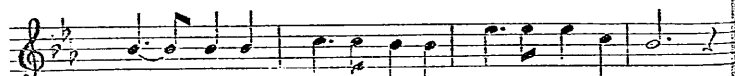
1. 1 3 3 | 2 1 2 3 5 5 | 4. 4 2 1 | 2-0

一 ニッポン ダーノン シト ウマレテ ハ  
二 イカレル ナーミーハー タカクト モ



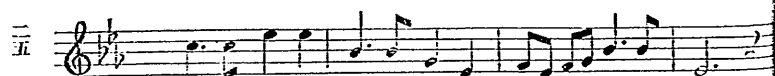
3. 4 5 5 | 3 2 1 2 3 3 | 2. 1 2 5 | 1-0

フコクノ ミーナナー ハカルベ シ  
フキマク カーゼーハー アラクト モ



5. 5 5 5 | 6. 6 5 5 | 5. 1 1 6 | 5-0

ウーミニ ムジノ トミアリ テ  
キータニ ミナミニ コギイデ テ



6. 6 1 1 | 5. 5 3 1 | 2 1 2 3 5. 5 | 1-0

ナミザニ ユカレストーコローナ シ  
スナドル ワーザモ クーニーノタ メ

## ● 日

## 光

(讀本卷三)

一 紀州きしゅうの那智なちともろともに、

その名知られし日光の

華嚴けごんのたき瀧は、その高さ

三十餘丈ありといふ。

二 落ち来る水は白布を、

空にかけたることちして、

雷かみなりひびき、雪くだけ、

飛び散る泡わはは谷にみつ。

◎遠洋漁業 (讀本卷四)

二六

一 日本男子と生れては、

富國の道をはかるべし。

海に無盡むじんの富ありて、

波路に行かれぬ所なし。

二 怒れる波は高くとも、

吹きまく風はあらくとも、

北に、南に漕ぎ出でて、

すなどるわざも國のため。

三 危き道をおかさずば、

勝れし功は立てられじ。

鳥かげ見えぬ所まで、

漕げや、家なるわが舟を。

四 種々の寶たからは海にあり。

取れど、拾へどつきもせじ。

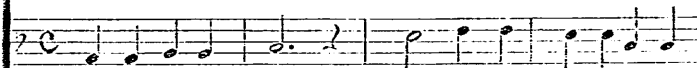
思へや獲物えものうち積みて、

歸る波路の愉快さを。



— [水の變態] —

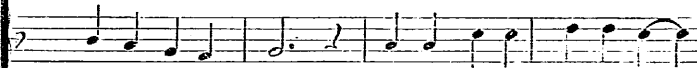
へ調四拍子



1 1 2 2 | 3-0 | 5-6 6 | 5 5 3 3

一 ナ ヤ マ ダ ノ キ リ ノ ナ カ ミ ナ

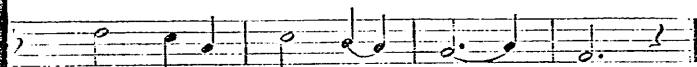
二 ア ケ ソ タ ル タ カ ネ ノ ク モ ニ



4 3 2 1 | 2-0 | 3 3 5 5 | 6 6 5 5

フ ミ ソ ケ テ ヒ ト ク ト ミ シ ハ

タ ナ ビ カ レ ヒ カ リ キ ヌ ク



6 5 3 | 5-4 3 | 2-3 | 1-0

カ カ シ ナ リ ケ リ

ユ ミ ハ リ ノ ツ キ

● 水の變態 (讀本卷四)

霧きり

一 を山田の霧きりの中道ふみ分けて、

人來と見しはかゝしなりけり。

雲。

二 あけわたる、たかねの雲にたなびかれ、

光消えゆく、弓はりの月。

雨。

三 けふの雨に、はぎも、をばなもうなだれて、  
うれへがほなる秋の夕暮。

雪。

四 ふくる夜の、のきのしづくのたえゆくは、  
雨もや雪に降りかはるらん。

霰あられ。

五 むら雲のたえまに、星は見えながら、  
夜行く袖に散る霰あられかな。

露。

六 白玉の、秋の木の葉にやどれりと、  
見ゆるは露のかかるなりけり。

霜。

七 朝日さすかたへは消えて、のき高き  
家やかけに残る霜の寒けさ。



# 【白虎隊】

(つゝ)



5̣. 5̣ 5̣ 5̣ 3̣. 3̣ 1̣ 1̣ | 2̣. 2̣ 2̣ 2̣ 5̣ 0  
 サン ヲー シ ナ ノー ユー ショー ネン  
 ツ カ レ シ ミ ナ バー イ カ ニ ヘン



5̣. 5̣ 6 6 | 5̣ 3̣ 2̣ 1̣ 2̣ 2̣ | 3̣. 3̣ 2̣ 1̣ | 5̣-- 0  
 コー レ ツ アー ヒー ツ ノ ラ ク ヲー ニ  
 タ フ ル ル カー バー ネー ナ ガ ル ル ナ



6̣. 6̣ 1̣ 1̣ | 5̣. 5̣ 3̣ 1̣ | 2̣. 2̣ 2̣ 3̣ | 1̣-- 0  
 ソー ノ ナ キ コ エ シ ビ ヲ ツ コ タ イ  
 ター ノ ム ヤ ダ マ モ ツ キ ハ テ ス

三三

# 【白虎隊】

變ホ調四拍子



5̣. 5̣ 1̣ 1̣ 7̣. 7̣ 1̣ 1̣ | 2̣. 2̣ 2̣ 2̣ 2̣ 2̣ 0  
 ア ラ レ ノ ゴ ト クー ミ ダ レ ク ル  
 ミー カ タ ス ク ナ ク テ キ オ ホ ク



4̣. 4̣ 4̣ 4̣ 3̣. 3̣ 2̣ 2̣ | 6̣. 6̣ 6̣ 6̣ 5̣ 0  
 テー キ ノ ダ ン ガ ン ヒ キ ウ タ テ  
 ヒ ハ ク レ ハ テ テー ア メ ク ラ シ



3̣. 3̣ 3̣ 3̣ 4̣. 4̣ 3̣ 3̣ | 2̣. 2̣ 1̣ 2̣ 3̣ 0  
 イ ノ ナ ナ ナ リ トー タ タ カ ヒ シ  
 ハー ヤ ル ユー キ ハ タ ワ マ ネ ド

三三

◎ 白虎隊 (讀本卷四)

- 一 霰のごとくみだれくる、敵の彈丸ひきうけて、  
命を塵と戦ひし、三十七の勇少年。  
これぞ會津の落城に、その名聞えし白虎隊。
- 二 味方少なく、敵多く、日は暮れはて、雨暗し。  
はやる勇氣はたわまねど。疲れし身をばいかにせん。  
倒るゝ屍流るゝ血、たのむ矢玉もつきはてぬ。
- 三 残るは、わづかに十六士、「一たび、あとに立ち歸り、  
主君の最後にあはばや」と、飯盛山によちのぼり、
- 四 見れば、早くも、城落ちて、焔は天をこがしたり。  
「臣子の務はこれまでぞ。いで。いさぎよく死すべし」と、  
枕ならべて、こゝろよく、刃に伏し、物語、  
傳へて、今に美談とす。散りたる花のかんばしさ。」

明治卅八年七月十二日印刷  
明治卅八年七月十五日發行

高讀唱歌

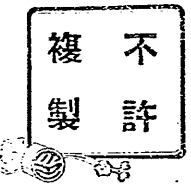
定價金拾錢

編輯者 吉田信太

發行者 東京市京橋區柳町五番地 櫻井庄吉

印刷者 東京市麴町區有樂町三丁目一番地 大西鍊三郎

印刷所 東京市京橋區弓町二十四番地 三協合資會社



發行所

東京市京橋區柳町五番地  
(電話本局三千番)  
東京市神田區錦町一丁目十番地

郁文館  
弘道館

